

<前回：修道制と文化構築>

(1) 修道の宗教性の普遍性とキリスト教修道制の起源

1. 修道的な宗教生活は、キリスト教にかぎったものではなく、多くの宗教が共有する生き方、生き方の伝統である。孤独な超人的な修行(独居)と共同的な修行(共住)
3. 宗教的生の形態としての修道
 - ・使徒的生活(via apostolica)の理想：キリストの福音を宣べ伝えるために、キリストのように清貧を尊び、使徒たちのように共同生活を営む。
 - ・指導者のもとでの修養の意味：瞑想における異常心理(幻覚による精神錯乱)への対処。神と悪魔の「識別」の必要。経験者への相談。

(2) キリスト教修道制の歴史的展開——古代から中世へ

- ・エジプト → 東方教会(正教) → 西方教会(カトリック)

4. エジプト

エジプトのアントニウス(251-356)：キリスト教修道制の父

隠修士の形態から共住生活へ(パコミオス)

共同生活の規律とそれに対する服従、清貧

修道制は、パレスチナ(4世紀のエルサレムは「聖地」となり、聖地巡礼が始まる。

多くの修道院が建設。西方から、ヒエロニムスやルフィニウスらが訪れる)、シリア(シメオン)へ広がる。

5. 東方修道制の伝統

カッパドキアのバシレイオス(-c.379、カエサリアの主教、カッパドキアの三教父の一人)：東方キリスト教の共住修道制の基礎を築く。三つの会則。

6. アウグスティヌス

『カトリック教会の道徳』(創文社)

『アウグスティヌス会則』の「第二会則」における労働の規定(cf.「第三会則」)

労働重視の思想：労働することを欲しない修道志願者に対して、労働の有益性を説く(『修道士の労働について』)。

7. アイルランド、学者の島

(3) ベネディクト修道会と修道院改革の歴史

8. ベネディクト会則とグレゴリウス一世(590-604、修道士から教皇になった初めての人物)

- ・モンテカッシーノ修道院(525)＝ベネディクト修道会の設立。
- ・『ベネディクト会則』(530/534、ただし原本は喪失)

修道生活の入門という意味。入門書としての優秀さ。

東方やアイルランドの修道制のように厳格な孤独な修行を要求せず、中庸の精神で生活し、労働や定住を義務づけることによって修道院の経済的自立を図り、共同体としての修道院の運営を機能的に組織化した。修道院の自律性を確保するとともに、西欧に形成されつつあった農村社会(世俗社会)に適応する。

↓

修道院の西欧的形態の確立。

9. クリュニー修道院(910-)

修道院の世俗化の進展に対する修道院改革運動(11世紀のグレゴリウス改革との関係は議論が分かれる)。『ベネディクト会則』の遵守。

マリア崇拜(5世紀にビザンツで現れ、シリア、エジプトに普及、ローマには7世紀)、

荘厳な典礼（音楽）

10. シトー会(1098-)：クリュニー派修道士の規律弛緩への批判。『ベネディクト会則』の厳格な遵守。清貧。クリュニーの中央集権的体制に比べ民主的な形態。『愛の憲章(カルタ・カリターティス)』

封建領主的諸収入の放棄、労働の重視（開墾）、経済的自立（修道院経済）。

額に汗する者こそが真の修道士であり、労働は神の栄光のため。

クレルヴォーのベルナルド(-1153)の説教活動、異端に対応（アンリ派の異端を調査し、正統信仰に引き戻す）

11. 13世紀の托鉢修道会：民衆の宗教性のうねりに対応するために（都市、イスラーム）。
- ・ドミニコ会：弁舌と学問の修道士（異端の論駁、異端審問）、労働から学問へ、大学。
 - ・フランシスコ会(小さな兄弟の修道会)：民衆の新しい宗教性を求める敬虔な運動を教会的秩序の内部に取り戻す。『第一会則』（1221年、マタイ 19.21、マタイ 10.9-10、マルコ 8.34 を三箇条とする）、『1224年の会則』。清貧。

(4) アッシジのフランチェスコ(1181-1226.10.3)

「この人物は、近代的でダイナミックな中世が誕生した一二世紀から一三世紀への転換期という決定的な瞬間の只中であって、宗教・文明そして社会を揺り動かしたのだ。」(ルゴフ、v)

教会制度の周縁に立ちつつも異端に陥ることなく、新しいキリスト教社会にふさわしい使徒的活動のモデル、托鉢修道会という新たな修道会の勃興、一種の生態学的次元におけるキリスト教霊性を豊にした。

14. フランチェスコの信仰の遺産→時代を超えて、近代、現代へ

・物質的な豊かさの中であって、信仰的に生きる生き方。

教会権力の絶頂期におけるキリスト教的信仰の危機。

聖書のキリストに帰れ → キリストのように生きる

・信仰のことを聖職者にまかせるのではなく、信徒が自分の生活を信仰的に生きる。

「新しい敬虔」(devotio moderna)へ向かう動向。

俗人世界の宗教生活への参与の度合いが高まる、ラテン語から俗語へ
伝統的な修道会か、あるいは新しい兄弟会か

・環境危機の中で、キリスト者は自然との関わりをいかにして回復するのか。

(6) マリア崇拝と文化形成

15. 「マリアについての教義のうち主なものは、(一)新しいエバ、(二)永遠の処女、(三)神の母、(四)聖母被昇天、(五)恩寵の仲介者、そして(六)処女懐胎である。

また、マリアの教義の発展の歴史的段階はつぎの三つに分けて考えられる。

- 1 初期——二世紀から四世紀
- 2 マリア論の確立期——五世紀から十二世紀
- 3 マリア論の最盛期——中世の末期から反宗教改革期」(リューサー、81)

16. ニカイヤ公会議(325)：父と子の同本質

↓

マリアの位置：「神の母」、しかし、神ではない。(四)、(六)

ネストリウス（「神の母」論に反対）とキュリロス（「神の母」論を支持）の論争

エフェソ公会議（431）、カルケドン公会議（451）：ネストリウスへの異端宣告の正式確認。

18. 「聖人と並んで、あるいは聖人とは別格で、聖母マリアは古くから根強く崇拝されて

いた。時代より、また地域より、その崇拜の度合いや熱には差はあるが、一二世紀以降マリア崇拜は全体的に強まり、多くの教会や修道院、特に聖ベルナルドゥスの奨励によるシトー派修道院が聖母マリアに捧げられ、至る所にマリアや聖母子の肖像が飾られ、絵画が描かれた。」(原野・木俣、40)

5. 死と死後の世界—煉獄思想の誕生

(1) 聖書の死生観

1. 聖書の生命理解：土の塵から生きる者へ(神の息)

人間存在の有限性(他者へ依存した存在、生かされている)

<創世記2> 7主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

2. 聖書の宗教の現世中心主義

- ・民族の一員としての個人：「古代イスラエルは、個人の死後生については思弁を凝らさず、個人の死後も、民族イスラエルが存続しさえすれば、という集団的存続にのみ期待をかけて、個人の希望は集団の将来に託されていたのである。」(大林、57)
- ・イエス：「現世における生を、未来の報酬のために生きるという打算的なものではなく、現世に生きること自体に意味があると強調している」(大林、87)、「死後生から現生へと大胆な意識転換」。

<マタイ8> 21ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。22 イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

3. 現世中心(現世における生命の充実)と黙示文学(死後の生)

現在と未来との緊張 → 今の快楽を追求する刹那主義的生か、未来のために現在を犠牲にする生き方か

4. 現世の生命の充実とは? 神との交わり(本来的な人間関係の回復=神の国)

5. 死後のテーマ化・義人の死と死後の運命

「義なる同僚たちへのこのような思いやりから生まれてきたのが個人の復活の思想である。」(大林、62)

(2) 死についてのイマジネーション

6. 古代末期における死のテーマ化とその解決としての魂の不死性

「靈魂の不滅性というギリシヤ的な考えが、キリスト教にとって、どれほど強い影響力をもったかは、さらに、東方教会、すなわち古代のギリシヤ語圏内の教父たちの教説を一瞥すればわかる」(大林、103)

「最後の審判が、遠い未来へ押しやられるにつれて、古代や中世のキリスト教は、個々人の死後の運命に関心をよせ、それを魂の死後の旅として考えるようになった。魂の死後の運命は、神学的とか哲学的思索というよりは、むしろイマジネーションの対象となる。」

(114)

7. 三層構造世界観と死後世界の文化的表現 → 聖書テキストと文化世界の統合

時間軸と空間軸とにおけるイマジネーションの展開

文字とは別の経路における内面化。

cf. 仏像、マンダラ

8. キリスト教中世の死と死後の世界：天国／煉獄(purgatorium)／地獄

- ・世俗に生きる一般の人々(大罪は犯していないが小罪は犯している)の運命、

・聖人の意味・機能：功德に預かる。

「煉獄というのは、罪（厳密には大罪ではなく小罪）を犯した人の魂が、死後天国に入るために罪を浄める場所であるが、ジャック・ル・ゴフは煉獄の考えは一二世紀末から一三世紀にかけて「誕生した」としている」、「しかし、煉獄の観念そのものはそれ以前からあった。一二世紀末から一三世紀にかけて、教会が信者に、天国に行くのに必要だとして、生前から贖罪のために土地や財産の寄進を勧めたり、高利貸しをも取り込もうという社会的・経済的理由から、煉獄という考え方を大々的に広めたということである」（原野・木俣、45-46頁）。

（2）貨幣の正当化と煉獄

9. 都市の経済 → 貨幣の需要の増大

- ・農村経済における貨幣の浸透。領主の農民への税は生産物や賦役から貨幣へ。
- ・都市：手工業の発達→原材料と製造物の販売 →貨幣の使用
- ・富裕な市民と貧しい都市住民との格差＝溝の拡大。
- ・都市による自治権の獲得。ヨーロッパ北部（フランドルからバルト諸国）と北イタリアの台頭。

10. 「貨幣に関して教会で最もしっかりした理論的論争が展開された時代」（55）

- ・利息付金貸し（高利貸し）の禁止（13世紀に公会議）
- ・都市：托鉢修道会（ドミニコ会、フランシスコ会）の活動と大学の設立

↓

アルベルトゥス・マグヌスの「大罪一覧」（13世紀）

第一は色欲、物欲・金銭欲は三番目。

この世の楽園のイメージは、都市の大広場にある。

神学者は、自らの考察の中に都市と貨幣の台頭という問題を組み入れた。

- ・貨幣の普及にともなって、簿記、会計が発達
- ・大聖堂の建設費用、都市での労働において賃金制が重要性を増す。

11. 高利貸しの救済と煉獄

- ・高利貸しは地獄へ。
- ・高利貸しの名誉回復、
良きキリスト教徒でありたいという高利貸しの願い、貨幣の流通

↓

煉獄における高利貸しの救済（妻による魂の解放まで高利貸しがとどまっていた中間的居場所としての煉獄。リエージュの高利貸しの話。1220年頃）

- ・「儲け主義」は「悪徳と美德の間」に位置する。

12. 正義（中世の価値体系の最高のもは正義、そして愛徳）にかなった高利貸し＝理にかなった利息率

「正当な価格」

「価格は契約を結ぶ当事者の同意、つまり独自の論理によって行われ、いかなる外部基準にも従わない積極的な価格交渉をもって決定される」

13. 高利貸しは慈善家となることで天国に値する人になる。

「スクロヴェール家は、長い十三世紀におけるパドヴァの新興富裕層」「父親はダンテによって地獄に墮ちた高利貸しの一人に数えられているが、息子エンリコは父親の仕事を引き継ぎ、しかも業務を拡大したにもかかわらず、聖母マリアと貧者に捧げられたこの礼拝

堂を建設することで「愛徳」を表明している。」(152)

「商人聖クレルモのホモブヌス」「商人という職業によってではなく、その職をなげうって、自発的に貧困に身を捧げたため」(162)

14. 14世紀以降。両替証書と保険契約
高利貸しから銀行業へ。

(3) 煉獄の文化

15. 文学：『聖パトリックの煉獄』というテーマがフランスだけでなくヨーロッパ中に広まる。「これら文学作品の創出は、煉獄概念の広まりの因となり果となったと考えられるのである」(46) + 教会建築・教会美術：

聖書的世界の視覚化、「台頭してきた市民階級、文字の読めない民衆。彼らに、石に翻訳された「聖なる世界」を伝えるには、何よりもわかりやすさが求められた。」(馬杉宗夫『大聖堂のコスモロジー』講談社現代新書、127頁)

聖母：聖母戴冠・聖母の死・聖母被昇天。黙示録のキリスト：最後の審判。

16. ダンテの『神曲』(1304-08) 上(地獄) 中(浄火) 下(天堂)、岩波文庫。

- ・上昇のモチーフ(地獄→煉獄→天国)
- ・ベアトリーチェ・永遠の女性

ヘレニズム的伝統と聖書の伝統との結合としての西欧

cf. ユング派(ノイマン)の「アニマーアニムス」元型の「娘」

母/恋人・妻/姉/娘(超越への窓・導き手)

17. 「煉獄の出来事のこうした衝動は、要するに、天に昇るにふさわしくなり飛び立つことも可能になった魂の飛翔である。・・・おそらくダンテの煉獄も、やはり苦悩と試練の時間ではある。煉獄の魂は、いずれにせよ真の喜び、至福直観の喜びに奪われているのである。・・・煉獄全体は高みを憧れ求めている。ヴィルジリオに代ってダンテを天国に導くベアトリーチェが出現するのは、ようやく地上楽園(第三一歌)に入ってからである。」(ル＝ゴフ、543)

ローマの詩人のウェルギリウス：現世的幸福の導者として哲学、知恵の象徴

ベアトリーチェ：精神的幸福のためには神学を、愛の象徴として

「私の言うことがきみにわかったかどうか。それはベアトリーチェのことなのだ。／やがて君は、この山の頂で微笑む／幸福な彼女の姿を見るであろう。(六・四六一四八)」(534)

「ベアトリーチェは憐み歎きで、さながらに十字架のほとりのマリアのごとく変わりつつ、彼等に耳をかたむけぬ。」(ダンテ『神曲 浄火 中』岩波文庫、207)

「信仰の前提としての知性はここで終りをつげ、知性に代る信仰の説明者としてのベアトリーチェがウェルギリウスにかわり、「神学」、「愛」の象徴として、ダンテを窮極の天堂へと導いていくのである。」(ダンテ『神曲 天堂 下』岩波文庫、解説。399-400)

18. 「下降運動」「上昇運動」「プラトンにおいては一切は上昇に集中する。ディオティマはその上昇の道をソクラテスに教える役目しか務めぬ。ダンテもギリシア思想の影響を深く受けた人として、中世のカトリック教の典型的詩人として、向上に特に興味を覚えたことは隠れもなき事実である」、「しかしながら、それら凡てのイデアリスムの表現に人格主義の色彩を濃厚に反映させるものは、ベアトリーチェの姿である。「饗宴」篇の女性と全然異なって、この女性は自ら天より降って人を引き上げる神の恵みでなくて何であろうか。」(波多野精一『宗教哲学』(『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、429-430頁)

19. 西欧文学のモチーフ：上昇の旅と永遠の女性

ミルトン『失樂園』、バニヤン『天路歷程』、ゲーテ『ファウスト』（グレートヒェン）
「人生は旅である」、目標としての天国 cf. 神の国

<参考文献>

1. 岡田明憲『死後の世界——死者の運命・生者の運命』講談社現代新書。
2. 大林浩『死と永遠の生命——そのキリスト教的理解と歴史的背景』ヨルダン社。
3. 原野昇・木俣元一『芸術のトポス』岩波書店。
4. 佐藤彰一『中世世界とは何か』（ヨーロッパの中世1）岩波書店、2008年。
5. 河原温『都市の創造力』（中世ヨーロッパ2）、岩波書店。
6. 池上俊一『儀礼と象徴の中世』（中世ヨーロッパ8）、岩波書店。
7. 阿部謹也『中世を旅する人びと——ヨーロッパ庶民生活点描』ちくま学芸文庫。
『中世賤民の宇宙——ヨーロッパ原点への旅』ちくま学芸文庫。
8. ジャック・ル＝ゴフ『煉獄の誕生』法政大学出版局、『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店、『中世と貨幣——歴史人類学的考察』藤原書店。